

石 川 滋

## 『アジアの視点からみた経済開発』

Shigeru Ishikawa, *Economic Development in Asian Perspective*, Tokyo, Kinokuniya Bookstore, 1967, xix, 488 pp.

日本は欧米以外で経済発展に成功した唯一の国であるとなされており、しかも日本経済の明治以降の発展に関する研究成果が著しく多いために、従来から日本の経験は経済開発論の研究者達の注目をあびてきた。そして、多くの人々が、日本の経験は現在の開発途上国の参考になるとしてきた。しかし、日本の経験を基礎とした日本人研究者による本格的開発途上国開発論が皆無であったことは事実である。石川教授の今回の労作は、日本の経験を基礎とした日本人研究者による最初の開発論である。また、中国の経験が豊富に参照されていることも注目される。従来は、ソ連の経験に比較すれば、中国の経験が経済開発論の分野で参照されることが比較的少かった。

本書は5章よりなる。第1章は「初期条件」なる標題の下に、問題提起、モデルの説明を行っている。第2章は「基礎投資と農業開発の戦略」の下に本書の3分の1の頁数を費しており、農業分野でのアジア諸国の初期条件——日本が明治初年に有していた農業よりおけているという事実——と、その条件に基いた農業投資の戦略が論じられている。本書中の最も独創的な部分である。第3章「農業労働と低位雇傭」、第4章「農工間の資金の流れ」の2章はいわば労働と資本とを扱っており、農業からの2生産要因の流れの可能性と量とを吟味している。もちろん、第2章でも生産要因としての土地をかなり論じているが、第2章の主要関心は農業への投資の効率に関するものである。第3章は農業への労働投下の効率、低位雇傭の存在の吟味が主としてなされている。第3、第4章が合計で本書の3分の1の頁数を占めている。第5章は「技術進歩と二重経済的工業発展」なる標題の下に本書の3分の1を費して工業発展の問題を扱っている。本書のかなりの部分が、農業開発と農業からの労働および資本の動員の可能性に充当されているが、アジア諸国の現状を考えるとこの重点のおき方は当然であろう。なお、日本、中国以外ではインドの経験が甚だ多く参照されており、他のアジア諸国は主役を演じてはいない。石川教授自身もこの事実は認められている。(2頁脚注、他。)

本書における著者の主張は全アジア諸国にみられる経

済発展の初期条件の低さに発している。日本の場合、明治以降肥料の増投、品種の改良などによる急速な単位面積当り農業生産の増加→農業から非農業への労働、資本の移動→工業化の経路をとった。しかし、石川教授は現在のアジア諸国は肥料の増投によって単位面積あたり農業生産を急増せしめうる段階にはないと主張する。水のコントロール、洪水調節、灌漑、排水などの基礎投資を行わなければ、肥料増投の効果は少いと主張する。先述のように、第2章がこの主張を説明しているのである。そして、この初期条件の上にアジアの経済開発の全戦略が論じられている。この説明のために、著者はデータ処理の問題、開発の技術的側面の問題、そして経済理論上の問題など非常に広範囲の問題を包括的に論じている。程度は若干緩和されるが、他の章でも同じような叙述の仕方である。このようなスタイルの書物は当然のこととして、読者にかかなりの負担を強いている。しかも、かなりのあいまいさを残さざるをえなくなっている。例えば、石川教授は、日本、中国およびインドを大国と考えておられるようであるが、大国と小国との区別は必ずしも明確ではない。また、技術的問題でも、例えば「第2—7 図窒素肥料投下への稲作収量の反応」の如きは、どうして窒素肥料投下零のときに米の収量も零なのかかわからない。要するに、本書は大冊であるにも拘らず、余りにも多くのことを論じ、余りにも資料の吟味に深入りしているとなしうるのである。

評者は上述の本書のスタイルを本書の欠点とのみは断定しない。スタンフォード大学のブルース・ジョンソン教授などの、日本の経験の、無条件ともいいうるような、他のアジア諸国への適用を推奨することへの著者の警告を説得的ならしめる上で、著者が成功しており、本書を独創的なものたためているのは、少からず上述の本書のスタイルに負っているからである。執念ともいいうるような著者の諸統計の提示にはこの意味で深い敬意を表さざるをえないのである。断片的な資料を本当によく集められたとなさざるをえないのである。

兎も角、著者はジョンソン教授の主張するような比較的安い、肥料・品種改良による農業生産の増加→農業から非農業への資源の移動→急速な経済成長がアジア諸国の初期条件の下では実行しえないことを示した。先行投資(leading input)は水の統制などに関する基礎投資であるべきであることを示した。ここにアジア諸国のジレンマがある。というのは、第4章の示すところであるが、アジア諸国の初期条件の下では、中央政府の開発投資のための資金源は極めて限定されたものであるからで

ある。著者はここで基礎投資を大規模なもの、小規模なものに分け、後者の実行可能性を示唆する。大規模なものは中央政府がこれを行わざるをえないので、他の分野への投資を大巾に減らすことになるが、小規模なものは地方にある遊休な資源(農村における偽装失業の存在は第3章で論じられている。)を利用できるので、その機会費用が低いからである。第5章におけるコッテージ・インダストリーの場合にも同様である(466頁)が、中央政府が若干の補助をなすことによって、農村の遊休資源を利用しての経済発展がここに提唱されるのである。評者は、農村における偽装失業の動員の可能性に関する著者の楽観論には反対であるが、著者自身がその主張において首尾一貫しており、その主張がアジアの実状、初期条件に基いていることに深い敬意を払いたい。また、ここで日本の土地改良の時の経験が生かされていることにも敬意を表したい。

評者自身の立場からいえば、著者の a) 農民の価格誘引への反応の低評価、b) 人的投資の有効性への殆んど無視といってよい程の態度、c) プランテーション作物など輸出作物の無視、そして d) 農村の遊休資源の動員の可能性に関する楽観論などは大きな抵抗を感じるころである。また、アジアの農業を水田で代表し、遊休な耕作可能地がないとの断定も独断ではないかと考える。アジア農業を水田農業と等置する考え方はアダム・スミスからウィットフォールに到る多くの学者の伝統であるとは思うけれども。更にアジア農業で、水田耕作と畑作との間の耕作の集約度に大きな差があり、畑作の集約化の可能性は大きいと考えられる。将来の食糧需要増加を考えてみても、畜産の増加→飼料の増産の必要は米の増産の必要よりはるかに急を要するのであると考える。最後に、a) 第5章での工業分野問題の議論の際に製品に対する需要面のことが殆んど論じられていないこと、b) 土地制度の改革などの制度改革にふれられること甚だ少いこと、c) 貿易の統制の問題、その他に関してもふれられていない。これらに関しては著者の今後期待したい。

〔逸見謙三〕

Г. В. Ошпоров 他編

『労働者階級と技術進歩——労働者階級の社会的編成における変化の研究』

Г. В. Осипов и др., под ред., Рабочий класс и технический прогресс—Исследование изменений в социальной структуре рабочего класса, Москва, Изд. Наука, 1965, 361 стр.

ここ10年来のソヴェト社会の変動過程の基底をつらぬいているものは、いうまでもなく、社会主義から共産主義への全体制的移行であるが、この移行をめぐって提起されている多くの(政治的、経済的)問題とならんでいゆる社会学的問題がさいきんとみに比重をましてきたようにおもわれる。このような傾向そのものが、移行の問題をもっぱら経済的発展の量的水準の問題におしこめ、社会的諸関係の変革とかあたらしい人間の形成という大問題を主として行政的、教育的措置によって実現しようとしたスターリンのヴィジョンにたいする批判であることは明らかである。スターリンにおいては理論上の客観主義と実践上の主観主義とが奇妙にからみあっており、一連の社会学的問題(とりわけ人間の問題)を科学的に提起することが不可能となっていたようだ。こんにちソ連邦において「疎外の克服」とか「分業の廃棄」とよばれる唯物史観や科学的共産主義論の根本問題が論議されるようになったのも、共産主義的人間の形成の問題を科学的に提起できるようになったことの反映である。

本書は、このような問題状況を背景として、現代的生産技術の発展が共産主義建設の総体的過程の内部ではたす人間変革的役割をたんに理論的にでなく、ソヴェト社会の経験的事実にてらして明らかにしようとする数多くのこころみのひとつである。著者集団は、著名な社会学者 Г. В. Ошпоров を中心とする科学アカデミア哲学研究所のスタッフであるが、調査研究の舞台となったゴリキー州(この州の工業は多くの点でソヴェト工業の典型とみなされている)の学者、技師、労働者も調査、研究、執筆に参加している。著作全体は8つの章にわけられており、マルクス主義的社会学初発カテゴリーである疎外とか分業などの理論的考察(第1章)からはじまり、現時点での大工業生産の技術的、組織的再編成過程の分析(第2章)、これが労働の性格と内容におよぼす影響(第3章)、直接生産過程における労働者の職業構成の変動(第4章)、共産主義的労働としての科学的、創造的労働の発生過程(第5章)、労働時間と自由時間(第6章)、労働と余暇の全体にわたる各種の社会統計学的変動の分析(第7章)な